

特集
墓地と向き合う

MESSAGE

墓地への思い「一墓一会」、 お墓が教えてくれたこと 890

チャップリン、ゴッホ、ベートーヴェン、手塚治虫。たった一度きりの人生を、素晴らしい芸術作品で豊かなものにしてくれた偉人たち。感動のもらいっぱなしでは申し訳なく、「ありがとう」の一言だけでも伝えようと、私は10代の終わりから33年にわたり、世界五大陸101カ国2,520人のお墓参りをしてきました。

私の肩書きにある「墓マイラー」とは歴史上の偉人に感謝を述べたり、その存在を身近に感じたくて巡礼する人のことを言います。

最初に墓参したのは、青春時代に感化されたロシアの文豪ドストエフスキーです。彼が人間に向ける眼差しの優しさに何度も救われました。1987年にロシア、当時はソ連のサンクトペテルブルグで墓前に立ったとき、「本当にいたんだ!」という感動に包まれました。それまで作品に胸を打たれながらも、作者についてはどこか架空のヒーローのような非現実感がありました。しかし、目の前の墓石は確かにこの世にいたという証拠であり、強烈な存在感に圧倒されたのです。

この墓地には作曲家チャイコフスキーの墓もあり、墓地を

出る頃には「他の芸術家にも御礼を言いに行かないと! バッハ! シェイクスピア! ゲーテ!」と決意を固め、ライフワークとなる巡礼の日々が始まりました。

私にとって、墓はただの石ではなく人そのものです。偉人の墓には故人が大切にしていた言葉や信念が彫られていることがあり、私はラストメッセージを聞くつもりで墓所を訪れます。

95歳の長寿を生きた映画監督ビリー・ワイルダーの墓には「NOBODY'S PERFECT (完璧な人間なんていないさ)」という自作品の有名な言葉が刻まれ、墓参者を励ましてくれます。『リンゴの唄』『ちいさい秋みつけた』の作詞で知られる詩人サトウハチローのお墓には、「ふたりでみると すべてのは 美しく見える」という愛にあふれた言葉が直筆で彫られ、しばし見入りました。

最も感動したお墓は炎の画家フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)で、今年ちょうど没後130年にあたります。彼は北フランス・オーヴェールの麦畑の中の小さな墓地に兄弟並んで眠っています。ゴッホは生前に一枚しか絵が売

れず、弟テオが仕送りで生活を支えていました。やがて弟に赤ん坊が生まれ、仕送りの大変さを悟ったゴッホは、「これ以上迷惑をかけられない」と37歳で命を絶ちました。テオは自分の子どもをフィンセントと名付けるほど兄が大好きだったため、その死に打ちのめされて、わずか半年後に心の病となって衰弱死しました。テオの仕事は画商であり、優しかった彼は兄の絵をうまく売れなかった責任を感じていたのかも知れません。

テオの妻ヨハンナが兄弟の墓を並べ、現在2人の墓はツタの葉で一体化しています。ツタの花言葉は「死んでも離れない」。私はゴッホの墓に世界各地でゴッホ展が長蛇の列になっていることを報告し、テオには「あなたがいなければお兄さんの絵もなかった」と手を合わせました。

また、ドイツの強制収容所跡にあるアンネ・フランクのお墓も強く印象に残りました。墓前にはたくさんの手紙が置かれており、英語、スペイン語、仏語、韓国語、日本語、いろんな言語で書かれていました。墓参者は国籍が違えども15歳のアンネを追悼する気持ちで一つになっており、文面は

「あなたのことを忘れない」というメッセージであふれていました。

米国のワシントンD.C.に眠るヘレン・ケラーも特筆すべき墓です。彼女は恩師のサリバン先生と同じ墓所に入り、点字の銘板に2人の名が並んで刻まれているのですが、墓参者が指で点字をなぞるため、そこだけ金色に輝いています。私は「ここまで色が変わるのに、何千、何万の人がお墓参りしたのだらう」と胸が熱くなりました。ベートーヴェンやブルース・リーの墓前でも様々な国籍の巡礼者と出会いました。

世界のどの墓地でも、亡くなった家族や友人を愛しく、懐かしく思って、追悼している人を見かけました。その表情は穏やかな人もいれば悲しみをたたえた人もいます。そこに宗教や人種の違いはありません。芸術作品から感じていた「人間は国籍や文化が違って、相違点より共通点の方がはるかに多い」ということを、墓巡礼を通して確信したのです。「互いに違うところを見るのが戦争、同じところを見るのが芸術や墓巡礼」。この結論に至る33年でした。皆さんも、人生の恩人の墓へ御礼を伝えに行ってみませんか。

世界中から墓参者が訪れるゴッホ兄弟の墓。左がフィンセント、右は弟のテオ(フランス・オーヴェール)(写真:筆者)



カジボン・マルコ・残月
KAJIPON Maruko Zangetsu

プロフィール

1967年生まれ。大阪府出身。文芸研究家にして「墓マイラー」の名付け親。歴史上の芸術家や冒険家などの偉人に感謝の言葉を直接伝えるため33年にわたって墓巡礼を続け、世界101カ国2,520人に墓参。「民族や文化が違って、人間は相違点より共通点が多い」をモットーに、テレビ、新聞など各メディアで墓巡礼の素晴らしさを語り続けている。連載「月刊石材」(石文社)。NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」出演中。著作に「東京・鎌倉有名人お墓お散歩ブック」(大和書房)など。